

# 【ねがいましては】

令和7年2月12日

KYOWA SCHOOL

第417号

## 「本まみれ」

前号のスキーマに事を発し、今井むつみ（慶應義塾大学環境情報学部教授）さんの著書『学力喪失』の「あとがき」の内容に感動を覚えました。

—最後に、幼少時から筆者に世界を探索させ、世界に接続することを助け、つねに本が家にある環境で育ててくれた両親に感謝の気持を表したい。両親ともに、毎日読書を欠かさない探求人で、筆者はその背中を見ながら成長した。そのような環境で育ったことを幸せに思う。—

もうお一人、これは新聞記事で出会った方です。作家の角田光代さん。早稲田大学卒、1990年、直木賞受賞。やはり文中より抜粋いたします。（書店活性化という題目で掲載）

—1990年に作家デビューすると、編集者から「もっともっと読まないと、書き続けられない」と言われて、より幅広く本を読むようになりました。この頃になると、店ごとの個性がだんだん分かってきて、書店に行くのがさらに楽しくなってきた。その後は、エンターテイメント小説や海外文学にも手を出すようになりました。今でも、書店通いは続けています。本屋さんに通って、棚に目を走らせていると、本が「呼ぶ」声に敏感になる。行き続けていないと、この力は退化すると思うんです。（中略）読んだことがない本を見つけると嬉しいし、本に触りたいし、実物を見たい。—

では角田（かくた）さんの幼少時はどうだったか？

—幼い頃から書店は好きな場所でした。お気に入りは、横浜駅近くの書店。本だけは好きなものを買ってもらえたので、本当に選び放題でした。本を読ませておけば、私が静かだったからかもしれません。—

お二人に共通することは、幼少時から「本まみれ」だったこと。それも強制ではなく、ご本人たちには自らの「読みたい」という意思があったことです。

本との出会い、今の子どもたちにはどのように「本」が映っているのでしょうか。身近な本として、まず「教科書」が筆頭に現れる子は多いと思われます。それとも教科書はあくまでも「教科書」であり、「本」とは別物として存在しているのでしょうか。それともそんなことは考えたこともなかった「教科書」はあくまでも「教科書」であり、「本」は「本」なのだと、自然体で接しているのか・・・。

とかく思われがちなこと、「本をたくさん読ませれば、きっとこの子は頭の良い子になるにちがいない。そうだ、今日は本を買って帰ろう。」本を買って帰ったご本人は、いつもと同じルーティンです。スマホに夢中・・・。

今井さんの傍には、気がつくと、いつもの「本に夢中のご両親」がいます。角田さんには「本だけは好きなものを買ってくれた」ご両親がいます。今井さん、角田さん、ともに本は自然体のかたちで存在していました。本が身近な所にあることが極々あたりまえだった。つまり「空気」のような存在だったのかもしれません。結果、それが起因したのか現在のような活躍をされています。

とくに強制を受けたわけではなく、命令をされたわけでもなく、自分の顔にあたり続ける「そよ風」のように「本」というかけがえのないそよ風を受け続けた・・・。

私は思います。学校の勉強もこのような「そよ風」のような存在であつたら・・・と。ここが温かくなるような存在、いつまでも浴びていきたい存在。いつもそばにいてほしい存在。そんな存在が「本」だったら・・・。

子どもたちのここにそっと溶け込んでしまうような「本」、そんな存在が教科書であったなら・・・。

このお二人の「本」に対する『無かった』イメージ（スキーマ）が、「競争、テスト、成績、比較」などではないでしょうか。つまり子どもたちの目の前に「本」を置いたとき、彼らがこの4つをイメージするようでは、真の学びはありえないのかもしれません。

ただ日常の中に「本」は空気のように漂っていた・・・という感覚を子どもたちすべてが持てたら・・・。

まず今井さんの子ども時代の部屋を訪ねてみましょう。今井さんは本を読んでいます。同じ部屋でもご両親がいつもと変わらぬ風景、読書をしています。時折「クスッ」と笑いがこぼれたり、「アッ」と声がでたり・・・。今井さんは本を読んでいる最中に度々お母さんやお父さんのところへいきます。「ねえ、これ何で読むの？意味は？」、「これはねー、〇〇〇と読むの、意味は・・・なんだよ。」当たり前の光景です。角田さんは『本が「呼ぶ」声に敏感になる』と書いています。本のほうから「あのー、私ってけっこう魅力のある本だと思いますが、いかがでしょう」などと声をかけてくれているのかもしれません。素敵な瞬間。

今の子どもたちにもこんな素敵な時間を、環境を与えてあげることが、本来の「教育」のあるべき姿だと思います。

それには身近なところに邪魔するものが存在しているのかもしれません。それが「〇〇〇」だとか、「△△△」だとか、言われたくありません。では〇〇〇、△△△とは一体何でしょうか？

私が読んだ本の中にあった少女のことばです。「学校に行くことに何の意味があるのでしょうか。」（『灰谷健次郎の発言〈4〉』一すべての怒りは水のごとくに一 より） 少女は気づいていたのだと思いました。